【個人研究】

原因帰属と気分・感情の関係の検討

神田　信彦*

A study of causal attribution and mood/emotion

Nobuhiko KANDA

This study examined hostile attribution bias and a mood-congruity effect and the effects of causal attribution of aversive events on depressed mood and anger. One hundred and seventy-three subjects completed a questionnaire that measured depressive tendencies（SDS）, aggressiveness（BAQ）, and causal attribution and mood/emotion of unpleasant hypotheticals. Regression analysis revealed no hostile attribution bias or mood-congruity effect. Aggressiveness and causal attribution, however, affected anger in tandem.

Key words : attibution bias, mood-congruent effect, causal attibution.

問　　題

私たちは現実をありのままに把握しているわけではないことは、これまで幾たびも示されている（例えばLippmann, 1922; Ross, 1977）。同様に常に論理的・合理的な判断や意思決定を行っているわけではない。近年の社会心理学領域における研究では、私たち人の情報処理過程について自動的処理の役割への注目が高まっている（例えばBargh & Ferguson, 2000）。これは無意図的あるいは無意識的に情報処理を行うことであり、情報のさまざまな側面を吟味検討し判断や意思決定を行う場合に較べ認知的資源を節約できる。その一方で判断に関わる種々の情報を考慮しないでなされるため不切な判断や行動をもたらす危険性もある。

自動的処理に関する概念の中で、判断に用いられる内容に主に注目しているものとしてステレオタイプ（Lippmann, 1922）、社会的スキーマ（Taylor & Crocker, 1981）、プロトタイプ（Cantor & mischel, 1979）やスクリプト（Abelson, 1981）などがある。これらは人や事象の持つ属性や特徴の一部からそれらに関するイメージや全体像が構成され私たちの中に保持されていると考えられる。

上記の概念を利用しながら判断の過程・情報処理の過程やそれに介在する過程に主に注目する考え方として、利用可能性ヒューリスティクスや典型的ヒューリスティクスのようなものや帰属のバイアスなどがある。

本研究では、これらのうち帰属のバイアスに関わる概念を取りあげる。自動的に形成されまた行われる認知やその過程はその人の生活する社会・文化に規定されながら先行経験によって形成されると考えられる。帰属のバイアスも同様であると考えられるが、それだけでなくその人の持つ特性や一時的な状態によっても影響されることが指摘されている（例えばNasby, et al., 1979; Bower, 1981）。

敵意帰属バイアス　子どもの攻撃傾向の研究領域では、攻撃性の高い子どもは敵意帰属バイアスを用いる傾向があると報告されている（Nasby et

* かんだ　のぶひこ　文教大学人間科学部人間科学科

al., 1979)。敵意帰属バイアスの考え方によれば、攻撃性の高い子どもは、他者の言動を自分と関連づけ、それが自分に対する悪意や敵意に基づいていると判断し、攻撃的言動で反応する。Crick & Dodge（1994）の攻撃行動に関する認知処理モデルによれば、対人場面で他者が示した行動に基づいて私たちは他者の意図を推測し、次にどのように行動するかを決定し行動化するには６段階の過程を経るとされる。これによれば６つの認知的過程のいずれかで錯誤が生じると攻撃行動や不適応行動が発現しやすくなるとされる。敵意帰属バイアスは第２段階である「手がかりの解釈」に問題があると考えられる。その対人場面が生起する全体の状況や他者の発しているさまざまな手がかりを検討することなく否定的判断が生じてしまうのである。

Crick & Dodge（1996）によれば敵意帰属バイアスの程度と年齢は負の相関関係にあるとされる。つまり年齢の上昇とともに敵意帰属バイアス傾向は減少する。成人では敵意帰属バイアスは生じにくいのかもしれない。また成人を対象とした敵意帰属バイアス研究はほとんど見られない。しかし、ドメスティックバイオレンスを行う男性がその妻の何気ない言動に敵意を読み取る、つまり敵意帰属バイアスを行うという指摘（Geen, 2001）もある。

気分一致効果　気分一致効果の考え方によれば、ある気分が生じるとその気分の持つ評価的側面に一致する記憶が優先的に記憶されたり再生される、何らかの判断が行われる、あるいは行動が生じるとされる。例えば、否定的な気分状態にある人は否定的な判断や行動を行いやすくなる（Bower, 1981)。気分一致効果を説明する考え方に感情情報説がある。それによると喚起されている気分と直接関係のない対象に対する何らかの判断を求められるとき、直接関係がないにもかかわらず、そのときの気分の方向が対象の持つ特徴に付加されて判断されてしまうとされる（Schwarz, 1990)。このようにある人のその時々の判断がその人の持つ気分によって方向づけられ偏向するとすれば、気分一致効果も帰属バイアスの１つとしてとらえることができる。

目　　的

本研究では不快事象を経験する場合に生じると考えられる「怒り」と気分の「落ち込み」と、その事象の生起した原因をどのように考えるか、つまり原因帰属との関係を検討した。これについて上述した敵意帰属バイアスや気分一致効果のメカニズムが関与しているか否かを検討した。

「怒り」の生起に関しては、主に敵意帰属バイアスが関与することが予想される。特性としての攻撃性は他者の悪意ないし敵意への帰属を促進し、悪意・敵意への帰属は「怒り」を喚起することが予想された。

一方、気分の「落ち込み」に関しては主に気分一致効果の関与が予想される。気分の「落ち込み」に連なると考えられる抑うつ傾向の事前の程度は、不快事象の生起の原因を自分に帰属し、自分への原因の帰属は落ち込み気分をもたらすことが予想された。なお本研究では気分の落ち込みと抑うつ傾向は連続体にあるものと考えている。

さらに、不快事象に関する原因帰属と、経験される「怒り」と「落ち込み」との関係、及び場面ごとに報告される「怒り」と「落ち込み」との関連も探索的に検討を行った。

方　　法

１. 調査協力者

埼玉県内の私立B大学の心理学系授業の履修学生173名（男子58名、女子115名)。

２. 質問紙の構成

（１）場面想定法による否定的体験３シーン

（①アルバイト先で努力を認められず責任者から叱責を受ける（被叱責場面)、②仲間の集まりで、自分と同性の友人がそのことを知りながら、自分のつきあっているボーイフレンド（ガールフレンド）と非常に楽しそうに話し仲良くしている（集まり場面)、及び③街頭で知り合いを見かけたが無視される（街頭場面)）を提示した。それぞれについて調査協力者にその事態が生じたと仮定し、どうしてそのような状況が生じたと考えるか

について、「相手の悪意」（当該他者）による原因の説明、「自分に原因がある」（自分）との説明、「さらなる他者の悪意あるいは関係」（その他）による説明が、どの程度当てはまると思うかを「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの５件法で回答を求めた。さらに「どの程度「気分の落ち込み」及び「怒り（カッとする）」を感じると思うかを同じく５件法で回答を求めた。

なお、選定した場面は、自由記述による予備調査によって「怒り」や「気分の落ち込み」を経験する場面を大学生にたずね、回答の多かったものである。

（２）抑鬱傾向の測定

Zung（1965）の「うつ自己評価尺度（SDS）」の邦訳版（福田・小林, 1983）で20項目からなり４件法で回答を求める尺度で高得点であるほど抑うつ傾向が高いと判断される。

（３）攻撃傾向の測定

Buss-perry攻撃性尺度（Buss & Perry, 1992）の邦訳版である「日本版Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）」（安藤他, 1999）。本尺度は24項目から成り、「短気」「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」の４つの下位尺度に分けられる。それぞれ６項目で構成される。「まったくない」から「いつもそうだ」までの５件法で回答を求めた。これらも高得点であるほどそれぞれの傾向が高いと判断される。

３. 調査方法

心理学関係の授業科目終了直前に調査票を配布しその場で回答を求め、回答終了後回収した。

４. 調査時期

2005年７月上旬。

結　　果

１. 抑うつ傾向と攻撃性の下位尺度及び各場面の「怒り」と「落ち込み」の程度

抑うつ傾向と攻撃性の下位尺度の平均得点と標準偏差はTable １の通りである。各尺度のα係数は「言語攻撃」以外の尺度はいずれも75以上であり尺度としての信頼性が十分あると考えられる。「言語攻撃」は.66とやや低い値であるため以後の分析に加えないこととした。

Table 1　SDS得点とBAQ各下位尺度の平均得点

	抑うつ傾向	短気	敵意	身体攻撃	言語攻撃
男性(n= 58)	57.90 (11.35)	15.26 (.53)	18.91 (4.43)	17.97 (5.10)	17.16 (3.46)
女性(n=113)	59.40 (11.36)	15.82 (4.70)	17.12 (4.56)	14.78 (4.52)	15.39 (3.74)
合計(n=173)	58.90 (11.35)	15.97 (15.96)	17.72 (4.59)	15.85 (4.95)	15.98 (3.73)

Table 2　各想定場面の各変数の平均値

		悪意への帰属	自分への帰属	他の原因への帰属	怒り	落ち込み
被叱責	男性	3.31 (1.10)	4.02 (.69)	3.84 (1.28)	3.59 (1.01)	3.76 (.88)
	女性	3.06 (.98)	4.10 (.63)	3.45 (1.40)	3.76 (.91)	3.76 (1.01)
	合計	3.14 (1.03)	4.07 (.65)	3.58 (1.37)	3.70 (.95)	3.76 (.96)
集まり	男性	3.38 (1.01)	3.59 (1.04)	3.81 (.89)	3.78 (.94)	3.76 (1.01)
	女性	3.30 (.94)	3.32 (.99)	3.93 (.92)	3.73 (1.13)	3.84 (1.00)
	合計	3.33 (.96)	3.41 (1.01)	3.89 (.91)	3.75 (1.06)	3.82 (1.00)
街頭	男性	3.34 (1.04)	3.41 (1.03)	4.14 (.83)	3.50 (1.14)	3.38 (1.14)
	女性	3.26 (1.01)	3.27 (1.10)	4.13 (.73)	3.36 (1.20)	3.54 (1.12)
	合計	3.29 (1.02)	3.32 (1.08)	4.13 (.76)	3.40 (1.18)	3.49 (1.12)

次に各想定場面の出来事の原因帰属（「当該他者」「自分」及び「他の原因」）、「落ち込み」気分及び「怒り」感情の平均値及び標準偏差はTable２の通りである。原因帰属及び気分・感情ともに性別による差は見られなかった。

２. 各場面の気分・感情間の関連

それぞれの場面ごとの「怒り」と「落ち込み」との間の相関係数をみると（Table ３）、「集まり場面」がもっと高く（r= .51, p<.001）、「街頭場面」（r= .32, p<.001）及び「被叱責場面」（r-= .21, P<.01）とは弱い相関を得た。「集まり」の相関係数と「被叱責」の相関係数の間に差があるか否かをHotellingの式により検討した結果、t=3.91, df=170, p<.001で有意であった。「集まり」－「街頭」間についてはt=2.59, df=170, p<.05と有意差を得た。「被叱責」—「街頭」はt=1.53, df=170, n.s.）であった。３相関係数間での２変数の検討であるので、この結果をそのまま採用することはできないが、「集まり」—「叱責」については有意差があると推測することができよう。

次に「怒り」「落ち込み」それぞれについて場面間の相関係数を算出した（Table ４）。「怒り」については「被叱責」—「集まり」間で有意な弱い相関を得た。「落ち込み」については、「被叱責」—「集まり」は有意な中程度の相関を、「街頭」—「被叱責」と「街頭」—「被叱責」では有意で弱い相関を得た。

Table 3 場面ごとの各変数とSDS及びBAQの下位尺度との相関係数

		抑うつ傾向	短気	敵意	身体攻撃
「被叱責」場面	悪意への原因帰属	0.17	0.17*	0.09	0.10
	自分への原因帰属	0.10	0.04	0.12	-0.08
	他の原因への帰属	-0.18	-0.13	-0.14	-0.07
	怒り	0.19	0.22**	0.18	0.26**
	落ち込み	0.14	0.11	0.07	0.00
「集まり」場面	悪意への帰属	-0.08	0.03	0.07	0.07
	自分への原因帰属	0.10	0.03	0.14*	0.07
	他の原因への帰属	0.01	0.08	0.05	-0.01
	怒り	0.07	0.25**	0.09	0.16*
	落ち込み	0.03	0.11	0.01	-0.01
「街頭」場面	悪意への帰属	0.01	0.05	0.15*	0.07
	自分への原因帰属	-0.05	0.02	0.09	0.06
	他の原因への帰属	-0.10	-0.19	-0.07	0.11
	怒り	-0.01	-0.06	0.00	0.08
	落ち込み	0.08	0.01	0.15*	0.05

Table 4　各場面の怒りと落ち込みの相関係数

想定場面	怒り—落ち込み	各場面の相関係数の差	
被叱責	.21 **	被叱責＜集まり	t=3.91 **
集まり	.51 **	集まり＞街頭	t=2.37 *
街頭	.32 **	街頭＞被叱責	t=1.53

*p< .05　** p< .01

Table 5　怒りと抑うつの場面間の相関係数

	被叱責 集まり①	集まり 街頭②	街頭 被叱責③	場面間の相関係数の有意差
怒り	.25 **	.05	.14	①>②　t=2.05, p<.05
抑うつ	.42 **	.22 **	.38 **	①>②　t=2.59, p<.01 ②>③　t=2.10, p<.05

Table 6　SDS及びBIQ下位尺度間の相関係数

	短気	敵意	身体攻撃
抑うつ	0.62 **	0.57 **	0.34 **
短気		0.60 **	0.46 **
敵意			0.39 **

*p<.05　**p< .01

Table 7　怒り・落ち込みを基準変数とする重回帰分析の結果

	被叱責場面				集まり場面				街頭場面			
	怒り		落ち込み		怒り		落ち込み		怒り		落ち込み	
説明変数	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r
身体的攻撃	.26**	.26**										
短気					.24**	.25**						
相手の悪意			.24**	.26**	.49**	.50**	.32**	.34**	.17*	.17*	.27**	.27**
自分に原因	.15*	.12	.27**	.29**			.28**	.30**				
その他の原因	- .15*	-.16*	- .18**	-.16*								
調整済みR^2	.10		.15		.30		.18		.02		.07	
F値	6.97**		11.44**		37.15**		19.94**		5.00*		8.94**	

βは標準偏回帰係数　rは相関係数　** P<.01　* p<.05

３.各尺度間の相関

Table ５は各尺度間の相関係数である。SDSで測定される「抑うつ」、BAQ下位尺度「短気」、「敵意」の間の各相関はいずれも有意で中程度な値を得た。

４.「怒り」と「落ち込み」を基準変数とする重回帰分析

各場面について、「他者の悪意・敵意への帰属」を基準変数、SDS及びBAQの３下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。「被叱責」場面で短気のみ有意（F=5.16, p<.02, β=.17）であったが重相関係数は低い値であった。他の場面は有意な結果を得なかった。

次に各場面について「怒り」を基準変数、SDS、BAQの３下位尺度及び各場面の原因説明を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（Table ６）。３場面ともF値は有意ではあるが、調整済みR２及び各標準偏回帰係数は低い値が目立っている。

事前の抑うつ傾向（SDS）及び攻撃性（Buss-Perry）の中で「怒り」への説明力を持ったものは、「被叱責」場面の「身体的攻撃」と「集まり」場面での「短気」であった。出来事の原因として「相手の悪意」への帰属は「集まり」場面と「街頭」場面で説明力があったが、「被叱責」場面では説明力を持たなかった。

次に「落ち込み」を基準変数とする重回帰分析の結果を見ると、事前の抑うつ傾向と攻撃性はいずれの場面においても有意な説明力を持たなかった。いずれの場面も「相手の悪意」への原因帰属が弱いながらも一定の説明力を持ち、同時に「被叱責」場面と「集まり」場面では、「自分」への原因帰属が弱いながら説明力を持つという結果をえた。

考　　察

本研究は抑うつ気分と特性として攻撃性が不快事象の経験に関する認知に影響力を持つ可能性について場面想定法を用いて検討した。しかし、敵意帰属バイアス、気分一致効果ともにこれを確認できなかった。

敵意帰属バイアスの観点から、「悪意」への帰属には、攻撃性が影響することが予想された。しかし重回帰分析の結果は、十分な説明力を持たなかった。敵意帰属バイアスは一般的に攻撃的な子どもに認められ、先述したように敵意帰属バイアスの程度と年齢は負の相関関係にあるとされる（Crick & Dodge, 1996）。今回はこの結果を示しているのかもしれない。

気分一致効果の考え方によれば、ネガティブな気分（本研究では抑うつ傾向）であるときこれに一致する記憶、判断や行動が生じるとされる。重回帰分析の結果では、事前の抑うつ傾向は想定されたいずれの場面においても、否定的な原因帰属へのへの影響力は見られなかった。こうした結果の背景には、本研究が場面想定法であるため自動的な認知判断が行われなかった可能性もある。

次に感情や気分の生起に影響する要因をみると、「怒り」については一貫した結果を得てはいない。「被叱責」場面と「集まり」場面では攻撃性の下位尺度がそれぞれ弱いながら説明力を持ったが、「街頭」場面では攻撃性下位尺度は「怒り」の喚起に関係していない。また相手の悪意への帰属は「集まり」場面のみ明確に説明力を持っていた。この結果は、一般的な人々の怒りの生起は、特性としての攻撃傾向によって一義的に喚起されるものではなく。特性としての攻撃傾向が一定の影響力を持つ状況と、その他の要因が強く影響力を持つ場合があることを示している。これは３場面間の「怒り」の程度の相関係数が弱い相関かあるいは無相関であったこととも一致する。「街頭」場面に較べて「被叱責」場面及び「集まり」場面は、自分が積極的に関与し、重要な場面であると考えることができよう。つまりその個人にとっての重要性の程度が［攻撃傾向―怒り］関係の喚起に関わっていると推測される。［相手への悪意の帰属―怒り］は重要性の程度に加え、場面の文脈の解釈によって影響を受けると考えられる。ボーイフレンド（ガールフレンド）との２者関係を知っていながら、それを否定することを意味し、他の原因で説明することは「被叱責」場面や「街頭」場面ほどには容易ではないのであろう。また想定場面での「落ち込み」と「怒り」との関係をみると、場面ごとにその値は異なり、「集まり」場面の相関は「被叱責」場面に対するよりも高い相関であると推測された。これは先に触れた状況の文脈理解が強く関わっているものと考えられる。またこれらのことから［攻撃性］→［敵意の帰属］→［怒り］（→［攻撃的言動］）という流れではなく、敵意の帰属と攻撃性は並列的に「怒り」に影響を与えていると考えることもできる。

「落ち込み」については、「被叱責」場面と「集まり」場面で、自分への原因帰属と相手の悪意への原因帰属が弱い説明力を持ち、「街頭」場面では自分への原因帰属が極めて弱いが説明力を持っていた。自分への原因帰属は３場面共通してあらわれた。否定的な扱いを受け、加えてその原因を自分に求めることは負の側面への自己注目をもたらし、「落ちこみ」が生じると推測される。注目されるのは、相手の悪意への帰属も「被叱責」場面と「集まり」場面で「落ち込み」に対し弱い説明力を持っていたことである。これらの場合、悪意への原因帰属はおそらく自分の期待と異なり理不尽であったり、裏切りである否定的行為に対する失望をもたらし「落ち込み」へと至るのであろう。また事前の抑うつ傾向は、自分への原因帰属と同様にここでもいずれに対しても説明力を持たなかった。場面想定という限界はあるが、ここで述べた結果はBeck（1967, 1976）の指摘する否

定的認知が抑うつをもたらすということと符合する。つまり否定的出来事について自分に対する原因帰属と他者の悪意への帰属は、自己に対する否定的認知と外界に対する否定的認知に関わるものと考えられ、これらによって「落ち込み」が生じたとも考えられる。

今後、場面想定法とは異なる研究手法による再検討が望まれる。

［引用文献］

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 1999 日本版. Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性，信頼性の検討 心理学研，究70，384-392.

Bargh, J. A. & Ferguson, M. J. 2000 Beyond behaviorism: On the automaticity of higher mental processes. *Psychological Bulletin*, 126, 925-945

Beck, A. T. 1967 *Depression: Clinical, experimental and theoretical aspects*. New York: Hoeper.

Beck, A. T. 1976 *Cognitive therapy and emotional disorders*. New York Unternaitonal university Press.

Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, **36**, 129-148.

Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1994 A review and reformulation of social information processing mechanisms in the children's social adjsutment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101

Crick, N. C. & Dodge, K. A. 1996 Social information processing deficits in reactive and proactive aggression. *Child Development*, **67**, 993-1002.

福田一彦・小林茂雄. 1983 日本版SDS使用の手引き 三京房.

Geen, R. 2001 *Human aggression*. Open University Press.

具志堅伸隆・唐沢かおり 2004 気分一致効果規程因としての気分原因帰属および認知資源量 社会心理学研究，**20**，48-57.

Lippman 1922 Pubic Opinion. 世論

Nasby, W., Hayden, B., & DePaulo. 1979 Attribution bias among aggressive boys to interpret unambiguous social stimuli as displays of hostility. *Journal of Abnormal Psychology*, **89**, 459-468.

Schwarz, N. 1990 Feeling as informaiton: Information and motivational functions of affective states. In Ee. T. Higgins & R.Sorentino（Eds.）, *Handbook of motivation and cognition: foundations of social behavior*. vol. 2 , 527-561. New York, giulford.

Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. Archives of General Psychiatry, 12, 63-70.